



2022年10月2日 説教「からだは暖かくなり」

列王記第二4章29～37節

前段において、シュネムの女は息子が病を得て、命を終えた後、即座にカルメ

ル山にいるエリシャの所に行き、自らの思いをぶつけた事を見ました。

1. ゲハジを派遣したエリシャ (29～31節)

①杖を顔の上に (29)「そこで、彼はゲハジに言った。『腰に帯を引き締め、手に私の杖を持っていきなさい。たといだれに会っても、あいさつをしてはならない。また、たといだれがあいさつをしても、答えてはならない。そして、私の杖をあの子の顔の上に置きなさい。』」女の訴えを聞いたエリシャは、すぐに従者ゲハジにシュネム行きを命じました。そして、なすこととしては、①腰に帯をしっかりと腰に締めること②手にはエリシャの杖を携えること。③会っても挨拶しないし、挨拶されても答えないこと。④女の家に着いたら、子どもの顔の上にエリシャの杖を置くこと、を伝えました。これはゲハジに一定の権限を与えたことが示されています。

②母親の確信 (30)「その子の母親は言った。『主は生きておられ、あなたのたましいも生きています。私はあなたを離しません。』」そこで、彼は立ち上がり、彼女のあとについて行った。」これを聞いて母は、エリシャ自身が息子の所に行くのを待ち望みます。彼女は、主が生きておられる命の神であること、エリシャが主からカリスマをいただいた預言者であること確認し、どんなことをしてもエリシャに直接関わってもらいたい旨を伝えます。エリシャもそのことが導きだと信じ、彼女が家のあるシュネムへ進む道を、その後についていくことになりました。

③応答なく (31)「ゲハジは、ふたりより先に行って、その杖を子どもの顔の上に置いたが、何の声もなく、何の応答もなかったので、引き返して、エリシャに会い、『子どもは目をさませませんでした』と言って彼に報告した。」ゲハジは言われた通りに、シュネムの町に行って、その裕福な女の家に行き、少年がいる屋上の間に入りました。それは特別な場所で、彼にエリシャからの権限が授けられていたからこそ入れたのです。ゲハジは杖を子どもの顔の上に置いたのですが、何の変化もありません。そこで、引き返したのです。そして、帰り道に主人であるエリシャと出くわし、「あの子は目を覚ましません。」と報告したのです。

2. 主に祈るエリシャ (32～34節)

①寝台の上に (32)「エリシャが家に着くと、なんと、その子は死んで、寝台の上に横たわっていた。」預言者エリシャは、急ぎ足でその家に向かい、その家に着きました。自分が普段使っている屋上の間に入ると、その子は既に死んでいるのを確認しました。自分が使うべ

ッドの上に横たわっている少年は、ピクリとも動かない状態でした。

②戸を閉めて (33)「エリシャは中に入り、戸をしめて、ふたりだけになって、主に祈った。」おそらくは、女には一言二言を伝えた後に、エリシャは、改めて一人でその部屋に入りました。今回は、外から人が出入りできないように、戸を閉め、少年と二人だけになって、主なる神に祈ったのです。命の造り主である神が、若い命に復活をもたらしてくださるようにと、祈ったことでしょう。

③その子の上に (34)「それから、寝台の上に上がり、その子の上に身を伏せ、自分の口を子どもの口の上に、自分の目を子どもの目の上に、自分の両手を子どもの両手の上に重ねて、子どもの上に身がかがめると、子どものからだが暖かくなってきた。」エリシャは祈りの後に、ベッドの上に自らも上がり、主に促されるままに、自分の身体を少年の上にかぶさるように乗せたのです。そして、自分と少年の口を合わせ、目も子供の目の上にかぶせ、両手は少年の手に重ねたのです。そうすると、その少年のからだは次第に暖かくなってきたのです。男の子に生気がよみがえってきたのです。主なる神の御業というしかありません。

3. その子は目を開け (35~37 節)

①部屋の中を歩き (35)「それから彼は降りて、部屋の中をあちら、こちらと歩きまわり、また寝台の上に上がり、子どもの上に身がかがめると、子どもは七回くしゃみをして目を開いた。」子どもの様子を見守りつつ、エリシャはベッドを降り、今度は部屋の中をあちこちと歩き回り始めました。預言者の象徴的行為と言われるものでありましょうか。その上で、ベッドに再びのぼり、少年の上に身がかがめたのです。すると、少年に反応が見られました。なんと、くしゃみを七回したのです。その後、目を開いて様子をうかがっているではありませんか。

②子を抱きなさい (36)「彼はゲハジを呼んで、『あのシュネムの女を呼んで来なさい。』と言いつけた。ゲハジが彼女を呼んだので、彼女はエリシャのところに来た。そこで、エリシャは、『あなたの子どもを抱きなさい。』と言った。」エリシャは屋上の間に従者ゲハジを呼び付けて、彼に命じました。「シュネムの女を呼んで来なさい」。女はその家のどこかにいたはずですが、邸宅ですから、多少の時間はかかったでしょうが、ゲハジは女を見つけると、すぐに屋上の間にいくように告げました。女がやって来ると、エリシャは「あなたの子どもを抱きなさい」と言いました。女が来ると、男の子は少し体を動かし、目を開けて母親の方を見て、何かを伝えそうな様子であったのではないのでしょうか。

③足もとにひれ伏し (37)「彼女が入って来て、彼の足もとにひれ伏し、地に伏しておじぎをした。そして、子どもを抱き上げて出て行っ

た。」記述は彼女が部屋に入ってきた時に巻き戻されます。彼女は部屋に入ってきます。そして、少年が生き返っている様子を発見します。感動と喜びが彼女のうちに満ちます。彼女はただ主に感謝する心をもって、エリシャの足もとにひれ伏して拝し、御礼、感謝、喜びの言葉を伝えたことでしょう。そして、子どもを抱き上げて、その部屋から出て行ったのです。

《結論》少年が生まれてから、シュネムの女は子どものことにいつも心を配って

いたことでしょう。それが、夫の働きの場所を見に行った子供が病を得て帰り、ついには命を落としてしまったのです。これほどショックなことはなかったでしょう。しかし、この子が生まれるのには経緯がありました。女の信仰深さを見たエリシャが神からの預言を与えられ、授かった子でした。そこで、エリシャのところに訴えに行ったことは当然の成り行きでもありました。女はエリシャに必死に自分の思いを訴えたのです。そして、道が開かれるまでは「あなたを離しません。」というほどに、徹して求めました。この信仰に基づく熱意がエリシャの心を動かす一因となったことは確かでしょう。

一方のエリシャは主に促されるようにして、まずはゲハジを送り、自らも女

の家に行き、導かれるままに男の子の命の回復のために用いられることに

なります。エリシャには、この男の子が死ぬということを予測もしていません

し、主からそのことを知らされることもありませんでした。しかし、女の様子

から薄々それを察知していたことでしょう。エリシャは女の家があるシュネム

までの道筋において、自分の師である預言者エリヤがツアレファテにおいて、世話になったやもめの息子の命がとられた時の話 (第一列王

17 章)

を想起していたかもしれません。その時、子どもの命を回復してくださった

ことを思い出し、神が働いてくださることを信じ、進んだことでしょう。寝台

の上や部屋の中での行動は、ただ主の促しに従うだけでした。それらは用

いられて子供は息を吹き返したのです。

ところで、預言者には人の命をよみがえらせる力があるのでしょうか。イエ

ス・キリストはラザロが死んだ時に、その蘇生に力を示されました。確かに

救い主であるキリストは神であり、その御力があつたのです。しかし、預言

者の場合は彼に力があるのではなく、神からの賜物が用いられたのです。

そこには大きな違いがあります。最後の預言者であるバプテスマのヨハネ

は、大いに用いられた人でした。しかし、彼はキリストについて、「私はその

方のくつのひもを解く値打ちもありません」(ヨハネ 1:27) と述べています。

預言者と救い主とは存在のありかたは根本から違うのです。

適用できるで
それでは、これらの出来事から、私たちの信仰生活に何が

しょう。まずはシュネムの女の信仰による熱意でありましょう。根本的には主

の恵みであることを確認しつつ、彼女の信仰が用いられたことから、私た

ちも倣いたいと思います。もう一つ覚えたいことは、私たち信仰者も実を言

と、一度死んだ者たちだということです。「私たちはキリストの死にあずかる

バプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。」(ローマ 6:4) とある通りです。罪ある者は一度、十字架のキリストと共に

死んだのです。それは何のためですか。6:4 の続きです。「それは、キリストが御父の栄光によ

って死者の中からよみがえられたように、私たちも、いのちにあつて新しい

歩みをするためです」。新しい命を与えられたということは、生まれながら

命は死に、復活の命を与えられて生きるということです。女が新たな希望

をもって歩み始めたように、私たちも希望を抱いて進んでいきましょう。